

## 昭和58年度の終りにあたって

館長 早田 憲 治

昭和58年度の終りにあたって、主要事業を振り返り、若干の感想を付言することとします。

- (1) 古くから開けていた岡山県には、数々の文化財が遺されています。本館では、これらの貴重な文化遺産を県民共通の財産として保護保存するとともに、一人でも多くの方々に「岡山県の歴史と文化」を理解していただくよう、毎年各種の事業を実施しています。

昭和58年度は、例年と異なり特別展を2回実施しました。一つは「岡山ゆかりの画人たち」です。展示作品の中では宮本武蔵の「芦雁図」が注目を集め、武蔵が絵を描くことを初めて知ったという人も多く、改めて武蔵の多才、偉大さに感嘆したとの声が多く聞かれました。もう一つの特別展は、弘法大師の入定1150年を記念して全国6会場で開催された「弘法大師と密教美術展」の岡山展です。展示作品のうち国宝、重要文化財が約9割を占めるというかつてない、内容の充実した展覧会でした。京都、東京の両国立博物館等に伍して開催したものであり、中国・四国で唯一の勧告承認出陳館としての本館の実力を全国に示し、実績を一つ重ねることができたものと自負しているところです。

巡回展と博物館講座は、開かれた博物館としての普及活動の一環として実施している事業であり、今後の博物館のあるべき方向としてより一層充実していく必要があると考えられます。本館を直接訪れることが難しい地域の人々にも一級の実物資料がみていただけるよう、巡回展の実施できる展示施設が県下各地に整備されることを念願します。また、博物館講座は応募者が定員の2倍を超えるという盛況でした。学芸課の総力を挙げての取り組みの成果であると考えられ、来年度以降も引き続き内容の充実に努め、受講者の期待に応えたいと考えています。

- (2) 本館は開館以来10余年を経過し、設備の老朽化や収蔵スペースの狭あい化が進んで来ていましたが、昭和58・59年度にかけて空調設備の更新費が予算計上されたほか、昨年途中から閉鎖されていた旧浩養軒部分を博物館の収蔵庫等に転用するために必要な改修費も予算化されました。これにより本館の機能が一層充実され、きめの細かい博物館活動が実施できるものと思います。
- (3) いよいよ瀬戸大橋時代も近づき、昭和62年度の秋には県立天神山美術館（仮称）の開館も予定されています。

同館では中世から現代に至る美術品を対象に蒐集するといわれていますが、同館との役割分担をどう定めるかによっては、本館の在り方を根本的に見直さなければならぬかも知れません。また、天神山美術館との関係はさておくとともに、現在本館はどちらかといえば専門的で、地味な展示になっていると思います。後楽園、岡山城、岡山美術館、夢二郷土美術館、オリエント美術館、天神山美術館という一大文化ゾーンの中で、本館が単なる文化財収蔵施設に埋没してしまうことのないよう、俗ない方をすれば、せっかく後楽園まで来たからには是非とも県立博物館に寄っていかねば損だと思わせるような展示の面での目立作り、県立博物館としての特徴作りを長期的展望に立って検討すべき大切な時期が来ているのではないかと思います。



特別展ポスター



## 特別展

# 岡山ゆかりの画人たち

— 桃山から幕末まで —

10.7～11.6

本館では、昭和47年に開館1周年記念展として「岡山県の絵画—古代から近世まで—」を開催いたしました。その展覧会は、須恵器に刻まれた画をはじめ、密教や浄土教の仏教絵画、雪舟等楊ら県出身著名画家の傑作などによって岡山における絵画の歴史的な流れを示そうと試みたものでした。

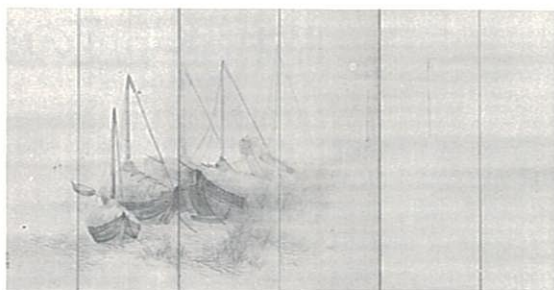


青松丹壑図 浦上玉堂筆

それに対し、本年度の特別展は、「岡山ゆかりの画人たち—桃山から幕末まで—」と題して、近世の岡山画壇で活躍した画家群像に焦点を合わせ、展示構成を行いました。近世期、岡山は宮本二天・浦上玉堂・岡本豊彦ら、日本絵画史上、盛名を馳せた画人を世に送り出しています。一方、諸国の画家たちがこの地を訪れ、あるいは遊び、あるいは居を構え、画笔を揮って岡山の画壇に貢献したことも見逃せない事実です。例えば、肥前の釧雲泉や、讃岐の黒田綾山らは県下で作画に励むかわら、優れた画人を育てあげました。また、意外な結びつきとしては、洋風画の先駆者司馬江漢が、備中足守藩の藩札の作成に携わっていたり、もと北尾政美と称した浮世絵師が美作津山藩御抱絵師として鋤形憲齋を名乗り、津山にその代表作を伝えたりしています。彼らの他にも、南画や四条派を中核とする岡山の近世絵画の展開に関与した画家の数は、決して少ないものではなかったのです。

したがって、今回の特別展では、岡山出身の画人に限定するのではなく、視野をひろげ、ゆかりの深い画家たちに

も眼を向けて、その制作のあとを辿ってみました。それが岡山の近世画壇の実態と、動向とを理解するうえで欠かせないと考えたからに他なりません。そして彼らの画業の到達点を示す代表作と共に、倉敷市下津井荻野家に伝来した1300余点にのぼる近世書画類の一部も展覧に供しました。



吉船図 岡本豊彦筆

その背景には、幕末前後の瀬戸内地域の画人の作品が多い荻野コレクションを加えることによって、従来、軽視されがちな近世後期の、それも地方画人の作品の見直しを、ご来館の方々に訴えかけてみたいという希望がありました。こうした意図が、果して今回の特別展に反映していたかとの判断は、来場者にお任せするとして、期間中を含め、それ以降も、私共の下に近世画人に関する注目すべきいくつかの情報がも

たらせました。

未見であった

平松曼谷の遺

作を見出すこ

とができたの

もそのおかげ

ですし、釧雲

泉・細川林谷

・淵上旭江ら

の魅力ある作

品にも触れる

機会を得るこ

とができました。

こうした

反響は実に嬉

しく、有難い

ものでした。

なお、これら

新資料につい

ても適当な折

に、ご紹介し

たいと思っ

ています。



寒香図 樺山峯

主 な 出 品 物

(◎重要文化財, ○重要美術品)

画 題	員数	作 者	制 作 年	材 質	所 蔵 者
◎花鳥図	6曲1隻	長谷川 信春		紙本著色	妙覚寺
◎架鷹図	6曲1双	曾我直庵	慶長14年(1609)	紙本墨画	岡山県立博物館
◎芦雁図	"	宮本武蔵		紙本墨画	
故事人物図	12幅	岩佐又兵衛	享保11年(1726)	紙本著色	福井県立美術館
繁馬図	絵馬1面	長谷川常時	延享2年(1745)	紙本地著色	吉備津彦神社
山静水鶏図	1幅	池田原繼五	寛政2年(1790)	板本墨画	尾道市立美術館
山静日長図	"	広瀬台岳	文化8年(1811)	紙本淡彩	
梅に黄鳥図	"	飯塚竹斎		絹本著色	
虎に叭々鳥図	襖2面	黒田綾山	寛政8年(1796)	紙本墨画	宝積院
青松丹壑図	1幅	浦上玉堂		紙本墨画	東京芸術大学
○山晚晴図	"	"	文化11年(1814)	絹本墨画	
○山翁嘯咏図	"	"		紙本墨画	
七玉堂琴譜	1張	"	天明元年(1781)	木造漆塗	正宗文庫
花鳥水図	6曲1双	浦上春琴	寛政元年(1789)刊	絹本著色	東京国立博物館
秋景山水図	1幅	浦上雲泉	文政6年(1823)	絹本淡彩	
風竹図	"	"	寛政5年(1793)	紙本墨画	
山水図	"	小橋陶復	寛政9年(1797)	紙本墨画淡彩	実相院
十羅漢古像	2幅冊	宮本君山	寛政9年(1797)	紙本墨画淡彩	誓願寺
漢独徳所図	2幅冊	"	文化4年(1807)刊	紙本墨画淡彩	岡山県立博物館
漢兒高名所図	1幅帖	藤正持山	慶応3年(1867)	絹本著色	
備中鉄拐図	1幅帖	藤川晃山	宝暦4年(1754)	紙本著色	松林寺
雲龍一望図	1幅面	大西醉月		紙本墨画	普賢院
巴陵奇観図	1幅冊	上旭江	寛政11年(1799) ~享和2年(1802)	絹本淡彩	正宗文庫
山昔富草越鶴図	1幅	長沢芦雪	寛政6年(1794)	絹本著色	
秋草鹿図	2曲1双	森徹山彦		紙本淡彩	普賢院
苦船図	6曲1双	岡本豊彦		紙本墨画淡彩	京都国立博物館
孔雀図	1幅	"		絹本墨画	東京国立博物館
郭子儀閣山水図	3幅	古市金峨	慶応元年(1865)	絹本著色	
牡丹に唐獅子図	杉戸4面	柴田義董		板戸著色	蓮台寺
西園雅集図	襖4面	"		紙本淡彩	
花卉雀図	1巻	白神嶺々	天保13年(1842)	絹本著色	
川雀夕涼図	襖4面	小野雲鵬		紙本著色	
鴨嶽遠望図	1幅	大原吞舟		絹本淡彩	
富嶽義卿像	"	司馬江漢	寛政9年(1797)	絹本油彩	妙応寺
画図西遊譚	"	"	文化9年(1812)	絹本著色	
江戸一目図	5冊	"	享和3年(1803)刊		岡山県立博物館
隅田川図	6曲1隻	鍛形惠齋	文化6年(1809)	紙本墨画淡彩	津山郷土館
雲煙楼記	8曲1隻	"	文政4年(1821)	紙本著色	サントリー美術館
下筆覚有神卷	1面	斎藤拙堂	嘉永5年(1852)	絹本墨書	荻野コレクション
竹石・梅樹図	1巻	花竹・椿山ほか		紙本墨画・淡彩	"
浅間山真景図	2幅	長町竹石	文化2年(1805)	紙本墨画	"
寒香図	1幅	細川林谷		紙本淡彩	"
風吹細々香図	"	椿山	嘉永5年(1852)	紙本淡彩	"
円相雑画帖	2帖	帆足杏雨	明治3年(1870)	紙本墨画	"
墨梅図	1幅	天野方壺	明治12年(1879)	紙本墨画・淡彩	"
山水図	"	伊藤花竹	"	紙本墨画	"
菊花図	"	鳥越烟村	弘化3年(1846)	絹本淡彩	"
山に紫陽花図	1巻	藤本鉄石	万延元年(1860)	紙本淡彩	"
岩に紫陽花図	1幅	森寛齋	慶応元年(1865)	紙本墨画	"





# 古備前の美

—桃山時代の茶陶と県指定重要文化財のすべて—

4.26 ~ 5.29

備前焼は、もともと生活雑器として生れ、中世の庶民の中で絶大な支持を得てきたが、室町時代の末期を境にして単なる日常雑器の地位にとどまらなかった。そこに見られる素朴な表情、わびの風情を愛した茶人達によって、備前焼の名声は一層高められ、備前焼はいよいよその隆盛のクライマックスに達していった。

今回は、絶頂を迎えた桃山時代の茶陶にスポットをあてながら、県指定重要文化財の備前焼のすべてを一堂に展示してみました。どのようなものがこれまで指定されているのかを県民のみなさんに知っていただくまたとない機会だったと思います。

## 出品目録

### 指定重要文化財

(◎国指定重要文化財 ○岡山県指定重要文化財  
□岡山市指定重要文化財)

出品名	年代	備考
◎備前 筒大花生	弘治3 (1557) 年	
○備前 壺		妙本寺境内出土
○備前 壺		勝山町若代出土
○備前 四耳壺	文安元年 (1444)	
○備前 広口花瓶	永正9年 (1512)	
○備前 茶壺	天文23年 (1554)	
○備前 広口花瓶	永禄12年 (1569)	
○備前 薄端花生		
○備前 鐘状水指	天正6年 (1578)	
○備前 四耳壺	天正18年 (1590)	
○備前 壺	慶長15年 (1610)	
○備前 欄間獅子		
○備前 唐獅子	貞享3年 (1686)	
□備前 壺	文明12年 (1480)	

### 茶 陶

備前 釣瓶型水指	桃山時代
備前 種浸壺水指	"
備前 福耳水指	"
備前 二耳水指	"
備前 棒の先水指	"
備前 緋襷二耳水指	"
備前 矢筈口水指	"

備前 烏帽子水指	"	小堀遠州所持
備前 鬼桶型水指	桃山時代	足守木下家伝来
備前 二耳円座水指	"	
備前 桶型耳付水指	"	
備前 三耳種付水指	"	
備前 棗型四耳水指	"	
備前 矢筈口水指	"	
備前 細水指	"	鴻池家伝来, 宗全手造蓋付
備前 杏茶盃	"	銘 只 今
備前 平茶盃	江戸時代	
備前 鑄茶盃	"	
備前 緋襷建水	桃山時代	
備前 緋襷建水	"	小 脇 差
備前 緋襷建水	"	自在軒宗徳所持
備前 大葉茶壺	"	備前国賀登上之土口 口誂也天正十八年四月吉日
備前 四耳葉茶壺	"	
備前 筒肩衝茶入	"	
備前 大海茶入	"	銘 布 袋
備前 筒肩衝茶入	"	銘 二 王
備前 筒肩衝茶入	"	江岑書付, 銘徒然
備前 緋襷大海茶入	"	
備前 小壺型片身替茶入	室町時代	
備前 筒花生	桃山時代	
備前 砧型花生	"	
備前 筒花生	"	
備前 飯型釣花生	江戸時代	
備前 蕪徳利	桃山時代	
備前 辣韭徳利	"	
備前 細口徳利	"	
備前 お預け徳利	"	
備前 鶴首徳利	"	
備前 芋徳利	"	
備前 緋襷大徳利	"	
備前 献上手徳利	江戸時代	池田綱政御留書, 北窯弥兵治
備前 蒔絵瓠徳利	"	
備前 緋襷火入	桃山時代	
備前 緋襷二耳付火入	"	
備前 布袋香炉	江戸時代	
備前 切子型香合	桃山時代	
備前 小鳥香炉	江戸時代	慶安二年九月
備前 手付鉢	桃山時代	
備前 手付鉢	"	
備前 緋襷大皿	"	
備前 陶	"	

テーマ展

# 高瀬舟

8.3～10.2

県下の河川を頻りに往来した高瀬舟は、平底木造船という構造上の特徴から、水深の浅い上流地域へも就航可能で、鉄道やトラックが登場するまで、内陸輸送機関の主役として活躍した。また、江戸初期の河川開発事業に貢献した京都の豪商角倉了以は、記録によると吉井川の高瀬舟を範として、諸国の河川に伝播したといわれ、かねてから本館にとって課題としていた展示テーマであった。

今回の展示は、実寸大に復元した高瀬舟を中心に、県内各地で収集した歴史・民俗資料によって、今や姿を消した高瀬舟の歴史、河川交通史の一端を紹介しようと構成した。

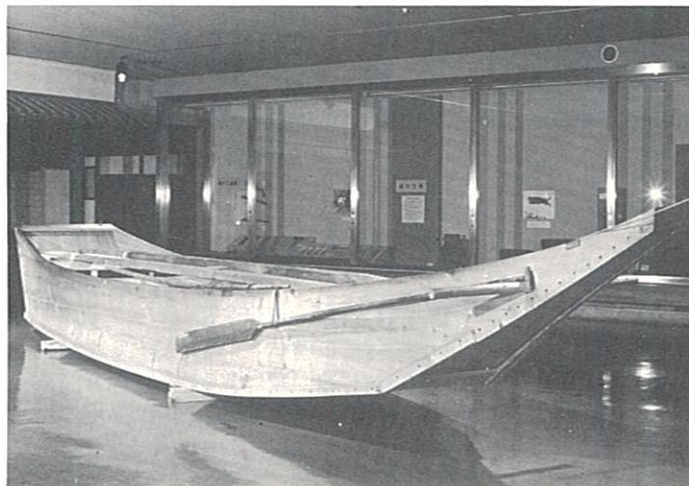
弥生後期から平安初期まで継承された祭祀遺跡である下市瀬遺跡（落合町）出土の木製舟型は、川舟の原型を示す資料であり、鎌倉末期の河川開発記念碑「笠神の文字岩」（備中町）、また新見庄関係資料中の「船給」の文字の記載は、高瀬舟前史を物語るものである。

そして、室町後期頃から登場したといわれる高瀬舟は、近世期においては、津山・勝山・新見付近まで常時就航し、まさに「舟山に登る」様相を呈し、全県下を網羅した船路網が展開されていた。領国経済の確立を図る封建領主は、水運開発に積極的に取り組んだが、松山から新見までの船路開発や運河「高瀬通し」を建設した松山藩主水谷勝隆はその一人であった。その結果、領主による河川統制は強化された。積荷にする運上銀の賦課、船株制の導入や松山・新見両藩による高梁川の就航規則を定めた「継舟制」や「番船制」に関する資料は、その河川行政の実態を示す貴重なものであった。

その他、櫓・樅・帆・引き綱・舵などの操船用具、鍋・釜・水桶・米櫃などの船頭の船中生活用具、高瀬舟の船大工道具の民俗資料も陳列した。この展覧会の資料調査・収集の過程において、聞き取り調査の対象になる高瀬舟船頭経験者の高齢化とともに、資料の散逸が著しく、改めて時代の趨勢のなかで消えゆく民俗資料収集の困難さを痛感した。

## 出品目録

木製舟型（複製）	2点	館蔵
落合町下市瀬遺跡出土		
笠神の文字岩（複製） 備中町所在	1点	館蔵
備中新見庄西方地頭田地実検名寄帳（複製） 原本 京都府立総合資料館蔵	1巻	館蔵
日禰書状	1幅	館蔵
高瀬舟模型	1点	津山郷土館蔵
船株御改帳	1冊	個人蔵
船株鑑札	1点	津山郷土館蔵
作州津川御城西下西大番所御札写	1冊	〃
新見藩船差役文書	6点	個人蔵
船方役要用帳・船方規定書など		
船さし	1点	〃
高梁川船路見取図	1巻	〃
年貢米送り状と貢米旗	4点	〃
船番所通行願（吉ヶ原番所宛）	2点	津山郷土館蔵
御用銅・小割鉄荷受取書	2通	成羽文化センター蔵
高瀬舟（復元）	1艘	館蔵
高瀬舟操船用具		
櫓・樅・帆・帆柱など	7点	館蔵
舵・錨・引き綱・腹あてなど	14点	個人蔵
船頭の船中生活用具 水桶など	8点	館蔵
船頭信仰資料		
船霊	1点	館蔵
金比羅御札	3点	個人蔵
高瀬舟船大工道具一式	29点	個人蔵



展示風景



## 特別陳列

### 前期展

## 物語図屏風

室町時代になると、絵巻に適した物語や軍記物語類が屏風に描かれはじめる。さすがに物語の王といわれる源氏物語に関するものが圧倒的に多い。現存する作品からみれば、室町末から桃山初めのものは大和絵系の画家によって描かれていたが、それ以降は、狩野・長谷川・宗達・又兵衛ら諸派の作例が認められ、画題も伊勢・平家・西行・曾我等の物語を加えて豊富になっている。しかも、画面形式が物語の順を追って描き込む小画面並列形式、主題を数場面選択して配する中画面形式、全体を単一の情景で構成する大画面形式、扇面や色紙を貼付する形式等に多様化してくる。

今回の特別陳列では、岡山近辺に所在する物語図屏風中、特に資料的価値の高いものを主題等、勘案しながら展覧に供した。

- ・源氏物語図（16世紀・尾道浄土寺、17世紀・岡山城）
- ・伊勢物語図（16～17世紀・倉敷個人）
- ・富士巻狩図（17世紀・岡山個人）



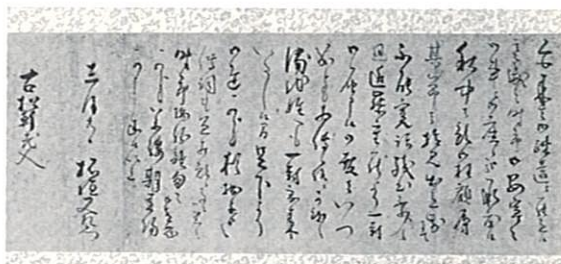
源氏物語図屏風

## 古川古松軒

昭和57年度末、真備町岡田の郷土史家、故粕谷米夫氏夫人喜代さんから「倉敷代宮拓植又左衛門書状」1幅をご寄贈いただいた。宛名は古川古松軒、内容は蝦夷地アトイヤの近藤重蔵から書状が届いたことを知らせて来たもの。年

紀はないが、寛政11年（1799）だと思われる。粕谷氏愛蔵の1幅であった。同氏はこれをいづれ岡山県立博物館へ寄贈したい旨話されていたが、実現せぬまま、昭和57年8月22日、病魔に冒され帰らぬ人となってしまった。このためご遺族からの寄贈となったものである。

古川古松軒については、かつて昭和51年度特別展で取りあげ、函館・横浜などから資料を収集、展覧したことがあったが、今年度、粕谷家から寄贈された資料の紹介を兼ねて新資料を中心に構成した。古松軒の生地総社市新本の宅源寺所蔵の「古松軒自画像」、寛政元年（1789）松平定信に謁見した経緯を記した「松平楽翁謁見録」、古松軒の70歳を賀して寄せられた詩・歌など。また古松軒女の嫁ぎ先に伝来する「西遊雑記」、「東遊雑記」などは一見の価値があったと思う。



古松軒宛書状

### 後期展

## 旧石器

旧石器時代の文化を考える場合、最も基本となるのは、つくり出された石器の形態ではない。石器の製作工程に示される技法が基本となる。原石から、石器がつくり出される工程の各段階に、その文化の持っている石器製作技術の文化的系統や発展段階があらわれているのである。

今回、展示したのは、野原遺跡で地点別に七つのユニットに分れて発見された石片のうち、F・Gのユニットを構成する石片で、それぞれのユニットは、生活行動の全体ではなく、その中にあらわれた特定期間の単一の活動を反映しているものと考えられている。

ことに、Gユニットは、石英という加工の困難な石材を選んで使用している。石英岩の使用は、旧石器時代でも古い時期の特色であるが、このユニットからは、これまで日本で発見された旧石器には、ほとんどみられない鋸歯縁石器を中心とした石器の組み合わせが発見された。

# 巡回展

## — 岡山県の歴史と美 —

8.13 ~ 8.15

八束村コミュニティーセンター

本館では毎年普及事業の一環として、開催希望市町村を募って、巡回展を実施している。考古、美術、文書、民俗、刀剣、陶磁器の各分野から、開催場所にふさわしいものを、館蔵資料の中から選定し紹介するものである。今回は最北端という地域柄から、初めて夏に期間を設定してみた。そして盆休みで帰省する人々の便を図った。成人式、しりげ展等の町側の企画ともオーバーラップさせたが、蒜山地区はむしろ、この時期が、蒜山大根・とうもろこしの取入れ、大宮踊、そしてキャンプ、登山、避暑等観光シーズンで繁忙期に当り、思った程客足は伸びなかった。

本年度の展示品目は以下の通りである。

- |                 |             |            |
|-----------------|-------------|------------|
| 1 ナイフ形石器        | 玉野市宮山出土     | 旧石器時代      |
| 2 特殊器台片         | 総社市宮山出土     | 弥生時代       |
| 3 袈裟襷文銅鐸        | 岡山市兼基出土     | "          |
| 4 仿製内行花文鏡       | 備前市丸山古墳出土   | 古墳時代前期     |
| 5 子持装飾須恵器       | 長船町出土       | 古墳時代後期     |
| 6 銅板線刻          | 蔵王権現釈迦如来鏡像  | 平安時代       |
| 7 (県重文) 太刀      | 正恒 古青江      | 平安時代末期     |
| 8 ( " ) 足利尊氏御教書 |             | 南北朝時代      |
| 9 水の子岩出土備前焼     |             | 室町時代初期     |
| 10 (県重文) 絹本著色   | 宇喜多能家像      | 室町時代       |
| 11 本蓮寺文書        |             | "          |
| 12 紫糸威腹巻        |             | "          |
| 13 備前焼          | 火禪大徳利       | 桃山時代       |
| 14 小早川秀秋知行目録    |             | 慶長5年(1600) |
| 15 日禊書状         | 来住法悦あて      | 江戸時代初期     |
| 16 盤香具          |             | 江戸時代初期     |
| 17 紙本墨画         | 山林清閑図 浦上玉堂筆 | 江戸時代後期     |
| 18 紙本淡彩         | 青壁茅亭図 広瀬台山筆 | "          |
| 19 紙本淡彩         | 柳陰馭物画 柴田義董筆 | "          |
| 20 紙本淡彩         | 天台山図 藤本鉄石筆  | 安政3年(1856) |
| 21 岸田吟香売薬錦絵引札   |             | 明治時代初期     |
| 22 正阿弥勝義金工品     | 鶏香炉         | 明治時代       |
| 23 備前刀作刀工程      | 今泉俊光作       | 現代         |

# 博物館講座



講座風景

博物館講座は昭和52年度に「成人大学講座」として発足し、56年度名称を改め、現在に至っているもので、今年度は下記の内容で開講した。本講座は「岡山県の歴史と文化」のテーマのもとに、多岐にわたる講義で構成されるが、当館所蔵の実物資料を活用しながら学習が進められるため、従来理解しやすいと好評である。特に今回は後楽園所長山本氏に講義の後、後楽園を案内していただき、非常に好評であった。

### 講座内容

テーマ	講師	開講日
博物館の仕事	館長 高田 哲夫	6.24 金
津山藩の課役	津山郷土館員 神尾 斉	"
備前焼の流通と時代的特色	学芸員 臼井 洋輔	7.1 金
庭園の歴史-日本庭園の美-	後楽園所長 山本 利幸	"
岡山県の近世絵画	学芸員 守安 収	7.8 金
備前・備中・美作三国の国分寺について	県史編纂室主任 葛原 克人	"
湛井十二箇郷用水について	県文化課 文化財保護主査 加原 耕作	7.15 金
高瀬舟の歴史-高梁川水系を中心として-	主 事 田村 啓介	"
古川古松軒の地理学	主 任 竹林 栄一	7.22 金
古代吉備文化の特質	学芸課長 高橋 護	"



